
その歌を

うわの空

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

その歌を

【著者】

IZUMI

【作者名】 うわの空

【あらすじ】
独りで生きていくために、身体を売り続ける『私』。
そんな彼女の腕を掴んだのは、見覚えのない青年だった。

「俺は覚えてるよ。君のことも、約束のこととも」

少しずつ変わっていく彼女と、いつまでも変わらない彼の物語。

泣いていた私のために、彼がうたってくれたあの歌を。ずっとうたい続けてくれた、その歌を。

私は。

大きく息を吸い込んでから、私はゆっくりとうたいはじめた。私の声は彼よりも高いし、うたうのが特別上手いというわけでもないけれど。

私はうたう。

耳に残っている彼の声に、今は聞こえない彼の声に、会わせるようにして。

「君が笑ってくれるから、僕はうたうんだ。君の姿が見えなくても、ずっと、ずっと。僕は今日もうたい続ける。この声が、いつか君に届けば、それでいい」

彼のために、私は今日もその歌を、うたう。

夜の繁華街は眩しくて、冷たい。

たくさんの人人がいるはずなのに、たくさんの人人が笑ってるはずなのに、なんでこんなにも空っぽな感じがするんだろう。

私は電灯の下にひつそりと立つて、息を殺していた。
誰にも見つからぬようだ。

そして、誰かに見つけてもらいたい。

「君、終電逃しちゃったの？」

酒臭い親父が声をかけてきて、内心で私は笑った。今日はハズレだな、と思つ。禿頭^{はげあたま}に視線をやらないように注意しながら、私はほほ笑んだ。

私が終電を逃したのかどうかなんて、こいつは心配してない。こいつが心配してるのは、『私の身体の値段』だ。

「……おじさん、ホテル代頂けませんか？ できれば朝ご飯のお金もくれると嬉しいんですけど」

ラブホテル一泊分、プラス千円程度。

それが私の値段だ。

汚い私の身体なんて、このくらいの安価でちょうどいい。

お金を頂けませんか？ と言われて、はいそうですかとタダで金をくれる男なんていない。それはもはや暗黙の了解で、向こうは嬉しい

しそうにうなずいた。

「分かった。じゃあ行こつか」

私は頷いて、相手の手を握る。……手汗が酷い。そしてやつぱり酒臭い。本当に今日はハズレを引いたなど、内心で苦笑した。

妻が待つてゐるからと言い残して、禿頭はそそくさと帰つていった。
しかし、やることだけはちゃんとやつていくんだな、愛しの妻
が待つてゐるくせに。

私は鼻で笑つてから、シャワーを浴びるためにベッドから立ち上
がつた。全身に禿頭の息がかかつてゐみたいで、気持ち悪かつた。

身体を売つてゐるのは、そういう行為が好きだから。というわけ
はない。私はむしろ、男もセックスも大嫌いだつた。売れるものが
あるから売つてゐるだけで、好きこのんでやつてゐるわけではない。
しかし、そこら辺を結構勘違いされやすい。こつちがちょっと嬌声
をあげただけで、男は色々と勘違いする。……ビジネスだから相手
が喜びそういうことをやつてゐるだけで、こつちは気持ちいいだなん
て思つていないので。

間抜けな奴らだと思いながら、私はシャワーの栓をひねつた。

十五の時に家を出てから約四年。その間、ずっと変わらないこの
スタイル。我ながら、よく続けてゐるなあと思う。たまに羽振りの
いい客が万札を落として行つてくれるの、そういう時は安い漫画
喫茶なんかで寝泊まりする。金がなくなれば、やる。そうやつて今
日まで一人で生き延びてきた。きっと、これからも。

私はシャワーを浴び終えると、禿頭がテーブルの上に置いていた金を確認した。

……五百円。

「遠足のおやつか」

私は笑った。いろんな意味で最悪の客だった。

翌朝、ファーストフード店で腹^{はら}ごしらえすると、私は駅前に向かって歩き始めた。今日は常連客と会う約束の日だ。一見真面目なサラリーマンに見える七三分けのおじさんは、服を買ってくれたり小遣いを多めにくれたりと、かなり羽振りが良かつた。多分、どこかの偉いさんなんだろうと思つ。まあ、相手がどんな仕事をしていようが私には関係ない。固定客はあまり作りたくないけれど、太つ腹なおじさんは大歓迎だった。会うのは一週間に一回程度だから、あまり負担にもならないし。

……ただ、相手の性癖がちょっとアレなだけで。

「あ、待つて！」

「え？」

後ろからいきなり腕を掴まれて、私は振り返った。背後にはギターラしきものを背負つた若者……というか、私と同じ年くらいの男

が立っていた。身長は百七十五センチほど。短い黒髪は、あちこちにはねている。肌は白く、若干垂れ目で鼻が高い。

……地味にモテそうな顔だ。ただし、『地味に』。

「……なに？」

相手が敬語ではなかつたので、私もため口で返す。男の恰好は、安物っぽい七分袖の『チームシャツ』に、これまた安っぽいベージュのズボン。つまり彼は、金とはあまり縁がなさそうだった。

「よかつた、やつと会えた。探してたんだ」

「探してた？ 私を？」

「最近、ここら辺にいただる」

人違ひじゃないの？ と言いたいのを堪えて、私は彼の顔をじろじろと見た。 やつぱり見覚えがない。彼を相手に『商売』をしたことがあつたのだろうか。 だとしたら、地味すぎて覚えていないのかもしれない。彼には悪いが。

黙りこくる私に気を遣つているのか、彼は爽やかな笑顔を無料で振りまいてくれている。しかしやはり、覚えがないものは思い出せない。私はため息をついた。

「……あのー」

「コーヒー飲まない？ おいしい店、知ってるんだけど」

誘つているのかなんなのか、いまいちよく分からない。私は彼の黒い瞳を見据えて、言い放つた。

「悪いけど、これから人と会う約束があるから。なんなら予約してくれてもいいよ。夜は空いてる」

「じゃ、夜に会ってくれる?」

「一ヒーに誘つてきた時と変わらない表情で、彼は嬉しそうに言った。彼の笑顔は無邪氣で、下心を感じない。私を予約するという意味を、分かっているんだろうか。

「……待ち合わせ場所は?」

予約してくれてもいいよと言つてしまつたことを後悔しながら、私はため息交じりに尋ねた。彼は私の言葉を聞くと自分の後ろを見て、

「『』の先に大きな公園があるの、知ってる? タコ公園」

そこに遊びに行こうとはしゃぐ子供のよつな顔で、言つてきた。大きな蛸たこの遊具が目印となつてゐる公園を思い浮かべながら、私はうなづく。

「あの公園の真ん中に、大きな噴水があるだろ。そこに来てほいんだけ。夕方六時くらいまでならいるから」

「分かった。じゃ、また後で」

とは言つたものの、面倒だと思つた。今から少し疲れる仕事があるし、その仕事が終わつたら、しばらく働かなくていいくらいのお金はもらえるはずだ。……『』との約束は無視してしまおうか。

そう思いつつ歩きだした私に、彼が叫んだ。

「君はもう、俺のこと忘れた?」

「え?」

私が振り返ると、先ほどと変わらない笑顔で彼がこちらを見ていた。

「俺は覚えてるよ。君のことでも、約束のことでも

「約束?」

私が訊き終わる前に、彼は公園へと向かって走り出した。

ギターを背負っていた彼のことを思い出そうと頭を捻つたものの、まったく記憶になかった。何かを約束した覚えもない。やっぱり人違いだつたんじゃないだろうか。

「次は、一週間後の十一時」

いつもやつて会つ約束をする常連客は、いま私の目の前にいる三井分けのおじさんくらいのはずだ。

「分かった

私はベッドの上から、ネクタイを締め直しているおじさんの後ろ姿を眺めた。おじさんの恰好はいつだってスーツだ。仕事に行くと嘘についてここまで来ているのかもしれないし、このあと仕事なんかかもしれない。せこいら辺は訊いたことがないし、訊くつもりもなかつた。

「それじゃ」

おじさんは私の方を振り返ろうともせずに部屋から出でていつた。私はため息をつく。今日はいつもより酷かった。しかし、こういう日はお小遣いを多めにくれる。

テーブルの上に置かれた福沢諭吉を数えてみた。五人。つまり今日の報酬は五万円。

「まじで」

私は小さな声で呟き、それを財布に入れた。時刻は十六時過ぎ。九月に入り秋が近づいてきているせいか、日が沈むのが早くなつていた。

「……あと二時間か」

夕方六時くらいまで、と言つていた彼のことを思い出し、頭を搔いた。身体が痛いし、動くのも面倒だ。けれど、約束と言われたのが引っ掛かる。

これで人違ひだつたら一円一万円くらいせしめてやると思いながら、私はバスルームへと向かつた。

夕方のタコ公園には、小学生くらいの子供が集まつていた。子供が嫌いな私は眉間にしわを寄せる。全力で自転車をこいでる子供も、転んで泣き叫んでいる子供も鬱陶しい。ついでに言つと、いちやついてるカッフルが多いのも鬱陶しかつた。タコ公園は、デートスポットとしても有名なのだ。

正面入り口から園内に入つて、まつすぐ奥へと突き進む。彼が言つていた噴水は、この広いタコ公園のちょうど真ん中にあつた。ちなみに、蛸を模した遊具は園内に一つある。その一つの前を通り過ぎながら、遊んでいる親子になんとなく目をやつた。

小さな子どもが母親の方に向かって走る。抱きつくる。親は受け止める。笑顔で。

その風景がやはり鬱陶しくて、私は舌打ちした。こんな公園を待

ち合わせ場所にした彼を、呪つてやりたい。

噴水前に近づくと、歌声が聞こえてきた。私は目を凝らして、顔ではなく服装を確認する。安物の「チームシャツ」。あいつだ。

彼は噴水のそばで、ギターを弾きながら歌をうたっていた。ストリートライブってやつだ。彼の弾いているギターは、ロックで使われているようなかっこいいのじゃなくて、……ウクレレを大きくしたみたいなやつだ。楽器について詳しくない私は、そのギターの正式名称を知らなかつた。

彼の周りには、五人くらいの人が集まっていた。それが多いのか少ないのかは分からない。けれどその中には、彼の歌声にうつとりと聞き惚れている女性もいた。私はそんな観客の中に混ざるのが嫌で、近くにあつたベンチに腰掛ける。彼が私の姿を見て、うつたんがらほほ笑んでくるのが分かつた。

この距離だと、歌詞はよく聞き取れない。けれど、メロディははつきりと聞こえてきた。

何故か、聞き覚えのある曲だつた。プロの曲を「パペー」しているのかもしれない。

うたい終わると、彼は「ありがとうございました」と言つて、丁寧にお辞儀をした。彼から一番近い位置にいた女性、うつとりと彼の歌を聴いていた女性が、拍手をする。それにつられて数人が、やる気のなさそうな小さな拍手を送つた。

彼は帰つていく観客たち全員に手を振り、楽器を片づけてから、

私のもとへとやってきた。相変わらず、ファーストフード店の店員のような爽やかスマイルを張り付けている。

「『めん、お待たせ』

「最後に歌つてた曲、誰の曲だっけ

お待たせつて、デーートみたいに言つなよと内心で突っ込みながら、私は彼に尋ねた。彼が首をかしげる。

「誰のつて、どうこいつ」と?」

「さつきの曲つて、プロの曲をコピーしてるとんでもしょ?」

「いや

彼は照れ臭そうに、人差し指で鼻の頭を搔きながら笑つた。

「あれは、俺が作った歌だよ」

「え?」

だとしたら私は今日初めて聞いたはずだ。なのに私はそれを知つていた。有名な曲のフレーズに似ていたんだろうか。

「……やっぱり覚えてないのかー」

彼はがっくりと肩を落とした。背負つているギターがずれてきて、彼はあわてて肩にかけ直す。それから、少しだけ寂しそうに笑つた。

「俺がうつたうつになつたのは、君のおかげなの」「え？」

先ほどから間抜けな返事をしているが、想定外のことばかり言わ
れているのでこんな反応になつてしまつ。「君のおかげ」なんて初
めて言われた。しかも多分、良い意味で。

「とりあえず、移動しない？ ゆっくり話したいし」

「え、話す？」

「何かおかしい？」

私と長話しよつとする密は珍しい。といつか、初めてかもしけな
い。彼が何を考えているのか分からなくて、私は彼の目を見つめた。
彼は私からふいつと田をそらしてから、やっぱり照れ臭そうに鼻
の頭を搔いた。

どうして私は、この訳のわからない男と、回転寿司に来ているんだろうか。

「晩御飯食べた？」と訊かれたので素直に首を振ると、じゃあどうかに食べに行こうと言われた。その結果が、一皿百円の回転寿司だ。テーブル席が混んでいたので、カウンターに一人で並んで座った。誰かと食事をするのも、回転寿司も久しぶりだった。

「俺のおじいだから、じゃんじゃん食べてよ」

彼は笑顔を張り付けたまま、目の前を通り過ぎていく寿司を次々と取りはじめた。もちろんそれは私のためではなくて、彼の分だ。私はとりあえずサーモンを取ると、割り箸を割った。

「……よく来るの？」

タツチパネルを難なく使いこなしている彼を見ながら、私は尋ねた。回転寿司なんて滅多と利用しない私は、タツチパネルの使い方を知らなかった。

「うん。バイト代が入った時とか、嬉しいことがあった時とかに一人で」

「……ふーん」

訊いてみたものの、大して興味はなかった。私は明らかに興味の

なさそうな返事をして、サーモンを口に放り込む。……脂がのつておいしい。回転寿司つて、こんなにおいしかったっけ？ サーモンばかり取っている私を見て、彼は笑った。

「サーモン好きなんだ？」

「……別に」

「ちなみに俺は、マグロが好きだよ」

「あっそう

ものすげくどうでもいい情報を提供されて、私は苦笑した。自分の『客』について詮索をするつもりのない私は、彼の名前も住所も年齢も尋ねる気はなかつた。が、

「俺、長谷川隼人。はせがわ はやと隼人でいいよ

彼の方から個人情報を言つてきて、私はまたもや苦笑した。まあ、彼が言つているのが本名なのかどうかは知らないが。

「……長谷川隼人、つて名前を聞いても思い出せない？」

彼は割り箸を右手に持つたまま、深刻な顔でそう言つてきた。記憶喪失になつた人間つて、こんな気分なんだろうか。「覚えてない」と、私は正直に首を振つた。申し訳ないけれど、どう頑張つても思い出せそうになかった。

「そつかあ」

彼はがっくりしながら、皿の前にあつた醤油入れを箸でつづく。

「俺は、君の名前まで覚えているのこ」

そう言われてぎょっとした。たまに『密』に名前を訊かれることがあつたが、いつも偽名を使つていた。しかも毎回、違う名前を。私は彼に、なんて名乗つたのだろう。そくら、あい、しうこ、れいな……他にもいっぱいあつたはずだ。彼に名前を訊かれた時、どれを使つたんだろう。

「……私の名前、言つてみてくれる？ 私はあんたのことを思い出せそうにないし、もしかしたら人違いかも」

回転寿司まで箸つてもらつておいてこんなことを言つのは失礼だけど、本当に思い出せないんだからしようがない。

彼は割り箸を皿の上に置くと、私の皿を見て言つた。

「早苗。……塚本、早苗」

彼の言葉を聞いた私は、皿を見開いて凝り固まつた。その名前は、

もう何年も使っていない、私の本名だつた。

客じゃない。客相手に、本名を言つたことは絶対にない。……

彼は密じやなかつたんだ。だとすれば、

「中学まで同じ学校に通つてたんだけど」

彼に言われて、私は目を閉じる。そつ。つまり、同級生だったといふことだ。中学卒業と同時に、私が家を出るまで。どうおりで思い出せないはずだ。私はその頃の記憶を完全に封じ込めて忘れようとしていた。そもそも子供のころに友達なんて作らなかつたし、休み時間も一人で本を読んでるような影の薄い生徒だつた。他の生徒に興味もなかつたので、クラスメートの顔ですらほとんど覚えていない。そんな私が、……特徴らしい特徴のない彼の顔を、覚えているはずがなかつた。

「学校を卒業してから、塚本が失踪したって聞いて」

「名字で呼ばないで」

思わずきつい口調で言つてしまい、彼がきょとんとした顔でこちらを見てくる。けれど名字は、どうしても嫌だつた。

「その名前はもう捨てたの。だから、呼ばないで」

「じゃ、なんて呼べばいい? …… さな、とか?」

それも本名をもじつて呼ぶから」と一人で宣言してから、私は頷く。

彼は「じゃ、さなつて呼ぶから」と一人で宣言してから、「さなが失踪したつて噂になつてたよ。俺も探したけど、見つからなかつた。俺、今年から……大学生になつてから、一人暮らしを始めたんだ。自宅から学校まで結構距離があつたしさ。そしたら、さなそつくりの人を見かけてびっくりした」

「……よく、私だつて分かつたわね」

「だつて顔、変わつてないじゃん」

彼は私の顔を見ながらくつくつと笑つた。私は無言でサーモンを食べる。自分の顔が昔とほとんど変わっていないことは、自覚していた。しかしさか、同級生に声をかけられるとは思つていなかつた。私の住んでいた街からこの街までは、割と距離がある。……だからこそ彼も家を出て、一人暮らしを始めたんだろうけど。

「……さなはや、家に帰らないの？」

そう言われて、私は彼の顔を睨んだ。あの家に帰れつて？

「あの家は、私の家じゃない」

私はそう吐き捨てるど、割り箸を置いた。昔の話をするのは、もう懲り懲りだ。

「私はもう、あんたの知つてる人間じゃないんだよ。失踪してから、私がどんな風に生きてきたかなんて知らないでしょ？『塚本早苗は死んだの。とつこの昔にね』

私が席を立とうとすると、彼が腕を掴んできた。思つたよりも力が強くて、一瞬だけひるむ。けれどそれを悟られないように、私は彼の顔を真正面から睨んだ。

「……はなしてよ」

「君がいま、何をしてるのかは大体知つてるんだ。実は何回か、さなを目撃したことがある。……おじさんと一緒に歩いてるところと

か

最後の方を小さな声で、彼が言つ。私はそれを聞いて、思わず吹き出した。

「だつたら、もういいよね？ おっさんと寝てばつかの女なんて、興味ないでしょ」

その言葉を聞いて、彼の顔がゆがんだ。……客と歩く私の姿を何度も目撃したもの、本当に『やつている』のかどうか、確認したかつたらしい。馬鹿な奴。私は嗤わらつた。

「分かつたらその手、はなしてくれる？」

「……」

「なんなら、あんたのお相手もしましょうか？ 一晩、家に泊めてくれるだけでいいわ。それとも、ホテルにでも行く？」

私の言葉に、周りの客が数人振り向いた。私はわざと、一いちらを見ている人間と視線を合わせる。みんな、私と目があつた途端、気まずそうに視線を泳がせた。

ほら見る。こんな女と一緒にいるなんて、恥ずかしいことなんだよ。

「……家に泊めるだけで、いいのか」

予想外の答えに、私は眉をひそめた。彼は私の腕を掴んだまま、

はなそりとしない。

「 そうよ。眠る場所と、ご飯代をくれればいいの。それが私の値段。あなたの場合、回転寿司はごちそうになつたから、あとは寝床だけでいいわ」

私が笑いながらそう言つと、彼はしばらく考え込んでから頷いた。彼の目は、とても力強かつた。

「分かつた。俺の家に来て」

「え？」

「毛布もあるし、どうにかなるよ」

彼は自分自身に確認するかのようにうつむいて、柔らかく笑つた。

彼の家は、夕食を食べた回転寿司から歩いて五分ほどのところにある、ワンルームマンションの四階だった。ワンルームといつても部屋はせまくないし、家賃もそこそこ高いはずだ。学生にしてはいい家に住んでるなと思ったら、家賃と生活費を実家から仕送りしてもらつているらしい。

「自分でバイトして稼ぐからいらないって言つたんだけど、親が心配性で」

そう言つて苦笑する彼から、顔をそむけた。

親が心配してくれるなんて、私が住んでいた家ではあり得ない。

「どうぞ。あがつて」

彼に促されて、私は中へと足を踏み入れた。

今日会つたばかりの男の部屋に入る娘。普通の親なら、心配するんだろうか。……我ながら、どうでもいいことを考えすぎている。私は一人で嘘いながら、彼の部屋を見回した。

彼の部屋は持ち主をそのまま表していると言つた、あまり特徴のない部屋だった。部屋にあるのは折り畳み式のローテーブルとパソコン、小さな木製のたんす、それから彼が壁に立てかけたギターくらいだ。ポスターなどは貼つていない。布団は押し入れの中らしい。特に散らかっているわけでも、派手なわけでもない。思わず私は苦笑した。

「適当なところに座つて。何か飲む？ 水道水か、麦茶か、コーラし

かないけど

「コーラ」

「分かった。ちょっと待つて」

彼はそう言い残すとキッチンへ向かった……と言つても、部屋の中に備え付けられているキッチンだけれど。

彼は透明なグラスを二つ用意してコーラを注ぎ、

「お待たせー」

言つだらうなと思つていたセリフを言いながら帰つてきた。大して待つていらないよと思いつつ、私はコーラを受け取る。グラスの中ではじける泡の音が、かすかに聞こえた。

ベランダに面している窓の近くに座つて、外を見る。先ほどの回転寿司の看板が、遠くの方で煌々と光つているのが見えた。

「……さなは、あまり昔のことを話したくはない?」

彼の声を、私は無視した。話すどころか思い出したくもなかつた。彼との約束も、もうどうでもいい。どうせ大した約束じゃないはずだ。こいつと会うのは今日で最後。明日になつたら他の街に移ろう。住所不定つてこいつの時に便利だよなと内心で笑つた。

私の沈黙の意味を理解したのか、彼も黙りこんだ。二人の男女が同じ部屋にいて、無言。なんてシユールな光景だろう。

そう思つていたら、彼が突然うたいだした。公園で歌つていた、あのメロディーだ。彼の歌声は高くも低くもなく、けれど心地の良い声だつた。なんとなく口ずさめそうなその歌を、私は無言で聞く。

彼はサビだけうたい終わると、手を組めた。

「俺はさ、さなに会えてよかつたって思つてるんだよ。さなが覚えていなくても、俺にとつては大切な思い出なんだ」

「……へえ」

過去の私が、こいつに何かしたのだろうか。けれど思い出したくなくて、私は話をそらした。

「あんた、明日は大学？」

「え、うん。そうだよ」

「じゃ、さつさと寝た方がいいんじゃないの」

私は「コーラを飲み干すと、テーブルの上にグラスを置いた。心の中で、仕事の態勢を整える。彼は時刻を確認して、笑った。

「本当だ。明日は一限からだし、早く寝た方がいいかな」

「じゃ、さつさとじでよ」

「？ 何を？」

「は？」

つかの間の沈黙。それを破ったのは彼の笑い声だった。私の言葉の意味を、理解したらしい。

「ああ、こやじめだ。俺、そういうことをやる気はないよ」

「え？ じゃあなんで私を部屋に泊めたの？」

私の問いに、彼の笑い声がぴたりと止まつた。そして、

「これ以上、自分を痛めつけてほしくなかつたから

彼の皿が急に真剣になつて、私は困惑する。中身の半分残つたグラスをテーブルの上に置いて、彼はまっすぐじらを見た。

「何度もさなを皿撃したって言つただろ？ …… さなはいつも泣きそつた顔してたよ」

「私が？」

家を出てから泣いたことは一度もない。泣きだつになつたこともない。なのに、何を言つてるんだ？」つま

「本当は好きじゃないんだろ？ …… おじさん達とやつこいつとすらの」

私は黙つた。好きじゃないといつも、当たつてになると言えれば当たつている。彼は「おじさん達といつか、」と唇くちづけ付け足した。

「たとえ相手が俺でも、さなは嫌だろ？ …… そういうことをやめたくない」

「.....」

「俺の家に泊まらなかつたら、他の男とホテルに行くのかもしれないと思つて。俺は、あんな顔をしてるさなを見たくないんだよ」

返す言葉が見つからなくて、私は彼の目を見ることもできずに俯いた。四年間封印していた箱を、彼に少しだけ触れられた感じ。それが何故か悔しくて、

「変な男」

私が呟くと、「よく言われる」と言つて、彼は笑つた。

目が覚めると、香ばしいにおいが部屋に充満していた。何かを炒めている音が聞こえてくる。私は布団の中から、キッチンの方を見た。

フライパンの前に立っている彼の後姿が見える。その横で、オーブントースターが赤く光っていた。パンを焼いているらしい。

私は自分の下着と服を探そうとして、どちらも身につけていることに気がついた。裸で眠る日の方が圧倒的に多いせいでの、ついつい下着を探したくなる。そんな間抜けな癖に気付いて、一人で苦笑した。それからのそりと布団から起き上がり、彼のもとへと近寄った。

彼はフライパンの右半分でソーセージを、左半分で目玉焼きを器用に焼いていた。目玉焼きは二つ。オープンの中の食パンも二つ。

私の分の朝食も、用意してくれているらしい。

「うわあ……」

私が後ろに立っていることに気が付いた彼が、間抜けな叫び声をあげる。

「びっくりしたー。こいつの間にやられたの？ おはよっ

「……おはよー」

私は寝癖のついた髪の毛をいじりながら、ぶつきらぼうと返した。髪が柔らかいせいのかなんなのか、妙に寝癖がつきやすくて困る。髪の長さは肩よりも下くらいだけど、それも関係しているのだろうか。

「ねえ、ドライヤー貸して」

「どうぞ」

彼はフライパンの上でワインナーを転がしながら「朝、」はんももうすぐできるから」と笑った。

油でテカテカに光っているソーセージ、黄身が程良く半熟に仕上がっている目玉焼き、きつね色のトースト、生野菜サラダはレタスとトマトで彩りよく。それから、麦茶。

「飲み物が、オレンジジュースか牛乳だつたら完璧だろ?」

私が思つていたのと同じことを、彼が笑いながら言つた。まあ別に、麦茶でも構わないのだけど。

「いやあ、誰かと一緒に朝、」はん食べるの久しぶりだな。いただきます

「…… いただきます」

私は、いただきますと言つのすら、久しぶりだった。

「昨日、よく眠れた?」

彼に訊かれて、私はうなづく。

「むしろ、あんたの方が疲れなかつたんじゃないの？」

彼の家には布団が一つしかなかつたので、私が布団を使い、彼は床の上で寝る羽目になつたのだ。……私は添い寝してもいいと言つたんだけれど、彼に断固拒否された。結局、この季節にしては少し分厚く、冬ならば少し肌寒いであるう微妙な薄さの毛布一枚で、彼は眠つた。

私の問いかけに「肩が少し痛いかなあ」と答えながら、彼は笑つた。

「でも大丈夫。雑魚寝さいのねとか慣れてるし」

「……ふーん

まあ、床の上で寝るのも今日で終わりだろ？
けど。

「今日せー。俺は大学あるんだけど、せなほどうかる？ 一緒に来る？」

「は？」

私は食べようとしていたトマトを、机の上にぼとりと落とした。彼がそれを見て笑う。面倒になつた私は素手でトマトをつまむと、口の中に放り込んだ。

「なんで私があんたの大学に」

「だつて、家にいても暇だろ？」

「いや、ていうかもう、ここの家も出でこくから

「え、なんでー?」

田を丸くした彼を見て、私も田を丸くした。
何を考えてるんだ、こいつ。まさか、このまま一緒に住むとでも
思っていたんだろうか。

「なんでつて、ここの家は私の家じゃないし」

「ここの家、気に入らなかつた?」

「やつこつわけじゃないけど」

「じゃ、一緒に暮さない?」

そこいら辺で拾つてきた猫を飼つみみたいな気楽なノリで、一緒に暮
さないか提案してきた彼に呆れた。私を猫扱いしてくれるのは別に
構わないけれど、猫を飼うのと人間を飼うのとはわけが違う。大体、
意味が分からない。

「なんで一緒に暮らすの」

「君を止めたいから」

先ほどの気楽なノリはどこかへ吹き飛び、至極真面目な顔で彼は
言った。その切り替えの速さに、私はどきりとする。けれどそれに
気付かれてなくて、私は彼の田を睨みつけた。

「私の『仕事』のことば、あんたには関係ないでしょ」

「関係ない。けど、俺は辞めさせたいんだよ。わがままなもので」
開き直られたら、それ以上突っ込めない。言い淀んだ私に、彼は
せりつと言つた。

「バイトなら、良い所を知つてるんだ。そこを紹介する。身元照
会とかそういうのは心配しなくていいよ。……その店、俺の家から
近いんだ。だから、俺の家から通えばいいじゃん」

「…………」

「 それとも君は、今ままの方が幸せなの？」

寂しそうに笑う彼に、私は何も言えなかつた。

「昼過ぎに戻つてくるから待つて。さつき話してた店に、一度行つてみようよ。働くかどうかは、君が決めればいいし

じゃあ行ってくるねと言い残して、彼は大学へと向かつた。大学に行つてもやることのない私は、彼の家にいることにしたのだ。馬鹿正直に。

彼がない間に、逃げ出せばいいじゃないか。失踪は、得意でし
ょう?

そう思つてゐる反面、私は彼の何かにすがりつこうとしていた。

例えば私は、女としての何かを捨てた。

けれど私は、女としての何かにすがりついて生きている。
結局、捨てたはずの何かに頼っているんだ。　彼に対しても、

他人のことなんて、信用してなかつたくせに。

「馬鹿みたい」

私は大きな独り言を言うと、彼の部屋の押し入れを開けた。押入れの上の段には服が、下の段には布団が入っている。上の段のあいているスペースに、大学で使っているのだろう資料が積み重なっていた。　と思つたら、それはすべて手書きの楽譜だつた。一番上にあつた楽譜を一枚、手に取つてみる。楽譜を読めない私には、そこに綴つづられている曲がどんなものなののかは分からぬ。けれど日本

語はある程度読めるので、音符の下に書かれている歌詞は、理解することができた。

「……君が笑つてくれるから、僕はうたうんだ。君の姿が見えなくとも、ずっと、ずっと。僕は今日もうたい続ける。この声が、いつか君に届けば、それでいい」

口に出して読んでみて、そのリズムに気付く。私は唯一知っている彼のオリジナル曲に合わせて、その詞をうたつてみた。 ぴつたりだった。

「これ、あの曲の楽譜か

一人で納得して、もう一度うたつてみた。サビだけは、何故かしつかりとうたえた。

君が笑つてくれるから、僕はうたうんだ。

「……この曲、なんでこんなに懐かしい感じがするんだ？」

私は楽譜を元の位置に戻すと、敷きっぱなしだった布団の上に寝転がり、目を閉じた。

よく分からぬ。けれど、気持ち悪い。痛い。怖い。
家に帰りたくない、砂場でうずくまっている私に、誰かが声を

かけてきた。

「おうちにかえらないの？」

「かえりたくない」

私は泣きながら首を振った。近づいてきた人は、私の隣に座つて

「……な。さな」

ぼんやりとした視界の中に、彼の顔が見えた。気づけば眠つてたらしい。それに何か、変な夢を見た。彼が心配そうに、私の顔を覗き込む。

「大丈夫？ 具合悪いの？」

「……ううん。脅寝してただけ」

私は彼の腕時計にちらりと目をやる。現在、午後二時過ぎ。どうやら三時間近く眠つていたらしい。私はため息をついて、上体を起こした。彼が気を利かせて持つてきた麦茶を一気に飲み干して、もう一度ため息をつく。

「大丈夫？」

「平気だつてば」

私は彼に空になつたグラスを返すと、立ち上がつた。シンクにグラスを置いている彼に、後ろから声をかける。

「で、なんかの店に連れて行つてくれるんでしょ？」

さつさと連れて行けと促すつもりでさつさつと、彼は「ひひひ」を振り返つて苦笑した。そして自分の頭を指差しながら、

「その前に、寝癖直した方がいいと思つた」

茶化すよつな笑顔でそつ言つた。

「……ドライヤー貸して

「どうぞ」

私は右に向かつてはねてゐる自分の髪の毛をいじりながら、何度も分からぬため息をついた。

彼に案内された場所は、タコ公園の近くにある小さな喫茶店だつた。木製の外壁は焦げ茶色で、良い意味でも悪い意味でも渋くて古めかしい店だ。ドアの前に、膝の高さくらいのダルメシアンが鎮座している。陶器のそれは所々が禿げ^はていて、これのせいで余計に店の外観が古めかしく見えているんじゃないかと思つた。ダルメシアンの首輪には、『Welcome 喫茶ダンデ』と書かれたプレートがついている。

「こんにちはー」

彼は何のためらいもなく、喫茶店のドアを引いた。やつぱりとうかなんといふか、ドアは自動じゃない。中に入ると、眠たくなるようなバイオリンの音が聞こえてきた。温かな色の照明と、コーヒー豆を挽く香り。店内には小さな観葉植物がいくつか置かれていて、『くつろぎの空間』と言わんばかりの風景になつていた。客は、数人程度だ。

「あ、いらっしゃい隼人君」

愛想のよい笑顔でそう言つてきたのはカウンターにいるおじさんで、恐らくこの人がマスターなんだろう。第一印象は、「黒いちょびヒゲ」。……私があだ名をつけると、残念なくらいセンスがないのがよく分かる。

日焼けしたような肌の色に、ポマードで固めた黒髪、二重で大きな目。身長は百八十センチくらいだらうか。それよりも何よりも、ちょびヒゲが気になつて仕方がない。

「どうも、チヨビさん」

彼がそう言ったのを聞いて、私は吹き出してしまった。
こいつのセンスもそんなもんか。

「？ 彼女は？」

彼の後ろにいる私を覗き込むように、マスターがカウンターから身を乗り出してくる。大きな目をぎょろぎょろさせて、だけど嫌な感じはしない目つきだ。

ちょびヒゲのマスターはにやりと笑つて、

「はつはーん。隼人君のかーのじょー？」

リズミカルにそう言った。それを聞いた彼が苦笑する。

「んー。彼女というかなんというか」

付き合つてもないのに同棲してゐる変な女というか。

「チヨビさん、バイトを募集してゐるって言つてたじやないですか。
で、この子を紹介しようかと思つて」

「本当！？ やだ、嬉しい！」

……ここにきて気が付いたが、ちょびヒゲのマスターはどうも女性っぽいというかなんというか、そんな感じだった。まあ別に、だからと言って何の問題もないのだけど。むしろ私は、そういう人たちの方が好きだった。

「ねえあなた、お名前は？」

「え？ エーツと」

「さな、です」

私の代わりに彼がわらつとひらつて、マスターはうとうとと頷いた。

「かわいい名前！ ジャ、さなちゃんって呼ばせてもらひわね！」

……普通、仕事中つて名前で呼ぶものなんじやないのだろうか。しかしマスターは私の名前を訊こうとはせずに、

「さなちゃん、いつから仕事に来れるかしら？」

鼻歌でもうたいだしそうな高揚した声で、そつとつてきた。

「え？ あ、明日からでも……」

「本当！？ 助かるわあ」

マスターは顔の前で両手を合わせて、笑つた。それにつられて私も笑う。ちょうどそのとき店のドアが開いて、制服姿の女の子が中に入ってきた。あの制服は確か、この近くにある高校のものだつたはずだ。

彼女は私の前にいる彼の顔を見て、

「隼人さん！」

嬉しそうな顔をしてから、ちらりと私の方に目をやった。
私も彼女のことによく覚えていた。昨日、彼が路上ライブをして
いる時に誰よりも聞き惚れていたあの女の子だ。

「おかえりなさい。かすみ、明日から店のことは心配しないで。そ
こにいるさなちゃんがね、ここで働いてくれることになったのよ。
だからあなたは、受験勉強に専念して」

マスターが優しい笑顔でそういうと、かすみと呼ばれた女の子は
「……準備してくる」とだけ言い残して、店の奥へと消えていった。
その声は少し震えていて、私は若干の気まずさを感じた。

多分あの子は、隼人^{がれ}のことが好きなんだ。

マスターは娘の変化に気付いているのかいないのか、人懐こい笑
顔を崩さずに続けた。

「それじゃ、明日からよろしく頼むわー。朝の六時頃、来てくれる
かしら」

「六時！？」

「モーニングをやつてるからねえ

朝に弱い私は、冷や汗をかいた。そんな私の顔を見た彼が、苦笑
する。

「起こしてあげるから大丈夫だよ」

「まー！ 同棲してるのー？」

マスターが大きな声で反応して、店内にいた数人の客がこちらを向いた。私はあわてて嘘をつく。

「モーニングコールしてくれるという意味です！ そうよね！？」

私が睨むと、彼は笑うのをこらえながら「わうわう」 と呟いた。

その様子を、店の奥でかすみちゃんが見ていて、私は気付いていなかつた。

『白喫業』しかしたことのない私は、誰かの店で働くのは初体験だった。

彼に喫茶店を紹介してもらつた翌日、私一人で店を訪れると、マスターが爽やかスマイルで待ち構えていた。

「おはよつ、さなちゃん！ 今日は土曜日でしょう？ だから、モーニングの時間帯もそんなに混まないと想つの。リラックスして働いてね！」

「はい」

「あと今日は、娘のかすみが、さなちゃんの教育係になつたから！ 仲良くしてあげてね」

「えつ」

マスターの横を見ると、かすみちゃんが恐ろしい剣幕でこちらを見ていた。

おいおい、マスターはかすみちゃんの気持ちに気付いていないのだろうか。

「……制服をお貸します。じゅうべどりぞ」

透き通るような凛とした声でそう言つと、かすみちゃんは店の奥へと向かつた。私はマスターに浅くお辞儀をしてから、かすみちゃんの後に続いた。

店の奥は、段ボールが積み重なった倉庫のような状態で、その中に制服も紛れ込んでいた。かすみちゃんは私の体型を見て、適当なサイズの制服を引っ張りだす。私は後ろから、かすみちゃんの横顔を眺めた。少しつり上がっている切れ長の目と、薄い唇。頬が白いせいでも、そばかすが目だつている。

彼女は私よりも年下のはずだけれど、年上だと言われても納得してしまいそうだった。

「これ、着てみてください。あと、髪は後ろで一つくくりに

「あ、はい」

彼女があまりにも事務的に話すので、世間話をする暇もない。私はとりあえず、かすみちゃんが渡してくれた制服に袖を通した。制服は白いポロシャツに黒のスラックス、その上に丈の長い黒エプロンという、じこく普通の地味なものだった。彼女に言われた通り、髪もきちんとまとめた。

着替え終わった私は、後ろで見ていたかすみちゃんに、「どう？」と訊いてみた。

「……やっぱりかわいいですね」

無表情でそう言い放った彼女は、私ではなく、私の後ろを見ているように見えた。そこには、誰も立っていないのに。彼女が唇を噛んでいるのを見て、私は苦笑した。

はつきり言って、私は「かわいい」部類の人間なんだろうと思う。目が大きかったり、唇の形が良かつたり、肌がきれいだつたり。ス

カウトされたことも、何度かあった。

けれど私の中身はぐちゅぐちゅで、誰にも見せられないくらい悲惨なものだ。

きっと、目の前にいる彼女の方が純粋で、綺麗なんじゃないかと思つ。

彼とお似合いのも、彼女の方だらつ。

「 それじゃ、店に出ましょ。やつすぐ開店しますから。今日は基本的なことをお教えしたいと思つてるので、よろしくお願ひします。」

「あ……よろしく」

彼女の言葉があまりにも硬すぎて、つまべ返事ができなかつた。

私の主な仕事は注文を聞くこと、マスターの作った料理やコーヒーを運ぶこと、時間が空いたら掃除。それくらいだつた。レジはもう少し経つたら教えるわねとマスターに言わされたので、今日はお冷や飲み物を持っていくことに専念した。

「こひつしゃこませ

営業スマイルを振りまきつつ、私はお冷をテーブルに置く。私の

隣のかすみちゃんは、険しい目つきでそれを見ていた。険しい目つきとこいつよりも、彼女のスタンダードがその目なのだと悟つ。

コーヒーの種類に関してはチンブンカンブンで、フルマンやらキリマンジャロやら、山の名前としか思えないような注文を続々と受けた私は混乱した。それを見ていたマスターは、「ちよつとずつ覚えればいいのよー」とウインクしてくれた。

常連客も気さくな人が多くて、新入りの私をすんなりと受け入れてくれた。

「お姉ちゃん。何なら後で俺とデートでも」

マスターが止めて、全員で笑う。……一瞬でも『仕事』の態勢に入りかけた私は、苦笑いするしかない。そんな時でも、かすみちゃんは無表情だ。敵対視されてるみたいでやりにいく。私と彼は、そんな関係でもないのに。

少しだけ仕事に慣れ始めた午後、彼が店にやってきた。黒の長袖シャツに迷彩柄のズボンという、ラフな格好で。

「いらっしゃいませ、お客様」

私はわざと硬い口調でそう言つて、頬が攣りそうなくらいの営業スマイルを振りまい。それを見た彼が笑う。

「制服、似合ってるよ」

それを聞いたかすみちゃんが、私と彼の顔を交互に見てくる。
「この男はどれだけ鈍感なのだろうか。私はいらいらしながら、
お好きなお席へどうぞ」と仏頂面で言つた。

彼はマスターの前、カウンター席に座ると、

「じゃ、こつもの」

「え、こつものー?」

彼の注文に思わず反応してしまった私に、マスターが笑う。

「そうねえ。常連さんはいつも、って言つことがあるから。でも、
さなちゃんもじきに覚えちゃうわよー。ね、彼女、仕事の呑み込み
が早いわね。さつすが隼人君のかーのじょーつ!」

「ちよ……

後ろから射抜くような視線を感じて、私は振りかえる。後ろにいたのはやはりかすみちゃんだ。

マスターといい彼といい、鈍感すぎる。

「あの。私と彼はそういう関係じゃないですか?」

「いいじりできつぱりと言つておかねばなるまこと思い、私は声を
出した。

「あひ。じゃ、どういづ関係なの？」

マスターは興味津々、かすみちゃんは疑念たっぷり、彼は面白そうな顔をして、じらりを見てきた。私は沈黙する。

「…………と、友達といづか」

やつとのことで言つたそれは、私が持つていないものだつた。これからもずっと、持つことはないであろう『友達』。けれどそれを聞いた彼は、嬉しそうにうなずいた。

「やつやつ、友達なんですよ。俺たち」

「え？」

田を丸くした私に、彼は歯を見せて笑つた。

かすみちゃんの田だけは、まだ疑つてゐるやつだった。

彼はブレンンドコーヒーを飲みながら、マスターと長い時間談笑していた。ちなみに彼の「いつも」は、ブレンンドコーヒーとスローン、それから大きなカントリークッキーだった。

彼は腕時刻を確認すると、マスターに問いかけた。

「さなは、もうすぐ上がりですか？」

「あ、そうね。今日はもうそろそろ上がる時間だわ」

その答えを聞いた彼が、テーブルを拭いている私に声をかける。

「俺、待ってるから。一緒に帰ろう」

「え、あ、うん……」

「さなちゃん、お疲れ様。今田はもう上がって頂戴。明日もまたお願いできるかしら?」

店長は顔の前で両手を合わせて、片手を閉じた。どうも、『お願い』のポーズらしい。

「……分かりました。じゅりゅりや、よろしくお願ひします

私がほほ笑むと、マスターは嬉しそうに小さく飛び跳ねた。

仕事を終えた私が店の奥に入ると、かすみちゃんがついてきた。
彼女の声が後ろから聞こえてくる。

「お給料なんですか？」日給、週給、月給、どれがいいですか？」

「んー。じゃ、とりあえず週給でもらえる？」

「分かりました」

その後は、無言。振り返ると、腕を組んだまま棒立ちしているかすみちゃんと目があつた。彼女が出ていこうとしないので、私はあきらめてその場で着替え始める。私が着替え始めると、彼女は後ろを向いた。けれど、やっぱり出ていこうとしない。

「……私に何か用？」

年下とはいえ職場の先輩なんだから敬語を使った方がいいんだろうけど、私は敬語が酷く苦手だった。

彼女は後ろを向いたまま腕を組んで、上体をゆつくりと前後に揺らしている。着替えながらその様子を見守っていると、彼女の動きがぴたりと止まった。それから、

「……隼人さんのこと、好きなんですか」

口ボットみたいな無機質な声で、そう訊いてきた。

「いや。そんなことないけど

「けど？」

揚げ足を取られて、私は黙りこんだ。それを彼女はどう捉えたのか、自嘲気味に笑つてからこちらを向いた。私はもつ着替え終わつていて、制服を畳んでいるところだつた。

「私は、彼のことが好きです」

私の目を見ながら、かすみちゃんは言い放つた。

「彼が誰のこと好きであつても、私は、彼のことが好きです」

「誰のこと、を強調されたので、私は言い返す。

「……彼が誰のこと好きなのかは、彼にしか分からぬわよ

「いいえ」

彼女は自分の腕に爪を立てながら、

「彼は、あなたのことが好きですよ。やうに「目をしてる」

「やうらを見上げるよつて言つると、早歩きで外へと出でていつた。

私は、どちらかといえば彼のことが好きだった。
けれどそれは、人間として。

私が知っている男と、彼は、何かが違っていた。そういう意味で、私は彼のことを好きになつていて。気についているといつ言い方でもいい。

けれどそれが恋愛感情なのかと訊かれれば、……分からぬ。

だつて私は恋愛感情、知らないから。

マスターとかすみちゃんに見送られて、私は外に出た。程よく疲れていて、気持ちがよかつた。

「 で、どうだつた？ あの喫茶店は」

隣を歩いていた彼が優しく、そして少し心配そうに訊いてきた。

「ん。働きやすかつた、かな」

あんたとマスターが、もうちょっとこの女心を分かつてたらねと内心で付け足した。もちろんそんな声は届いておらず、安心したよと彼はため息をついた。

流されてるなあ、と思つ。私は。

彼の家から逃亡する」とも、喫茶店で働くのを拒否する」とも、簡単にできたはずだ。

なのに私は彼に流されて、今までとは少し違ひ生き方を始めようとしている。

……流されてる、ではなくて。

流してほしかったのかも、しれない。

「……あのセ

「ん?」

彼は相変わらず、優しい笑顔をこちらに向ける。私はその顔を直視できなくて、向こうから歩いてくる野良猫を見ながら小さな声で言った。

「ありがとう、隼人」

「おっ」

彼が嬉しそうに、笑った。

「初めて名前、呼んでもらえた」

私はしばらく俯いたまま、早足で歩き続けた。

隼人は大学帰り、つまりは夕方から夜遅くまで、ファミレスでバイトをしていた。週四のシフト制、らしい。私の仕事は夕方で終わるため、夕食は「冷蔵庫にあるものを好きに食べていいから」と彼に言われていた。しかしこれ冷蔵庫を開けてみると、野菜とか生肉とか、……つまり、調理しないと食べられないものばかりだった。

そして私は、料理ができる人間ではなかつた。

「コンビニでサンドイッチを買って帰り、それを頬張りながら、喫茶店のメニューを覚えた。マスターが、コーヒーの名前とその特徴をメモして、私にくれたのだ。字は丁寧だしとても読みやすいけど、『このお豆は、酸味があるのが特徴的よん!』などと書かれているあたりがマスターらしい。私は一人でにやつきながら、マスターのメモを読んだ。

「ただいまー」

隼人は二十一時過ぎに帰ってきた。何か買ってきたのか、ビニール袋がガサガサと音をたてている。

「おかえり」

私はマスターのメモに目を落としたまま、返事をした。つかの間

の沈黙。……彼が部屋に上がつてくる気配がなくて、私は玄関の方を覗いた。

彼は玄関先で、花火の入つた袋をブラブラさせながら笑っていた。恐らく、千円くらいのセットだろう。

「花火しない？ そろそろ花火の季節も終わるしさ」

「二人で？」

「他に誘いたい人、いる？」

私は一瞬、かすみちゃんの顔を思い浮かべてから首を振った。彼女を呼んだら、ややこしくなる気がする。

「ううん。特にいない」

「じゃ、タコ公園にでも行こう」

彼は先ほどから靴を履いたまま、私のことを待つている。私は読んでいたメモ帳を閉じると、ゆっくりと立ち上がった。

夜のタコ公園には、不良っぽい中高生がちらほらいるくらいで、昼間に比べると人は少なかつた。蛸の遊具が下からライトアップされていて、かえつて不気味な感じがする。

「公園の端っこでいいよね。目立たないし」

私たちは適当な場所に移動すると花火の袋を開けて、安物のライターで付属品のろうそくに火をつけた。私はとりあえず、身近にあつた花火を揃んで、火にかざしてみる。しばらく間をおいてから、勢いよく火花が噴き出した。

「それ、三色に色が変わるやつかなあ？」

私の持つてる花火を見ながら彼が笑う。それから咳こんだ。どうも、花火の煙を吸い込んだらしい。私が笑っていると、赤色の光が青色に変わった。

「本當だ。色が変わった」

数えるほどしか花火をしたことのない私は興奮していたし、緊張もしていた。彼は咳こみながらも「スパーク！」と叫び、バチバチと音が鳴る花火に火をつけた。それからじちらを見て、目を細めた。

「さな、最近変わった」

「……そう？」

「うん。一週間前はもつと、トゲトゲした感じだった。ウニみたいな」

「たとえが悪いわね」

私が突っ込むと、彼は「失礼」と言つて笑つた。

「でも本当にや、会つたころはトゲトゲだつたんだ。近寄りがたいといふか」

「そんな人の腕を掴んだのは、どこのどいつよ」

私の花火が、青色から白色へと変わる。それに合わせて、私たちの顔の色も変わった。

「だつて、さなに会えたのが嬉しくてさ。トゲとか気にせず掴んじゃつたんだよ」

彼は嬉しそうに、自分の持っている花火を左右に振った。火花が滝のように、地面に落ちていく。私の花火は燃え尽きて、灰が赤く光っているだけだ。私は用意していたゴミ入れにそれを入れると、新しい一本を掴んだ。彼は笑っている。

「あの約束も、守れるといいなあ」

その言葉を聞いた私は新しい花火に火をつけながら、彼の顔を覗いた。彼は花火を見ながら、何かを思い出しているようだった。

彼の言つ約束つて、なんなんだろう。

けれどその約束を聞いたら、自分が封印していた記憶かのまで出でてきそうで、怖かった。

「さなちゃん、これ。少なくて悪いんだけど」

閉店後、マスターがすまなさそうに、けれども笑顔で、私に茶封筒を差し出してきた。モップかけをしていた私が首をかしげると、マスターはにやりと笑った。

「やだ、忘れてたの？ さなちゃんがウチに来てから、今日でちょうど一週間なのよ。週給って約束だったでしょ？」

「……あ」

すっかり忘れていた。この一週間、コーヒーの種類を覚えたり、接客をするのが楽しくて、給料という概念が私の頭から抜け落ちていた。

楽しいとは言つたものの、やっぱりまだうまく働けていない。それなのに、お金をもらつなんて悪いような気がした。けれどマスターはいつも通りの優しい笑顔で、私に茶封筒を渡してくれた。

「さなちゃんが来てくれて、本当に助かってるのよー。今までね、娘のかすみが店を手伝ってくれてたの。でもあの子も気づけば高校三年生で、受験生でしょ？ さすがにずっと店の手伝いをしてもらうわけにはいかないわ、って思つてたのよ」

「そうなんですか

私が初めてこの店に来た時、マスターがかすみちゃんに「受験勉強に専念して」と言つていたのを思い出した。九月にもなれば、受

験生は大変、……なんだろう。私は受験なんてしたことないから、知らないけれど。

マスターは少しだけ逡巡してから、片手だけで挙めるようなポーズをした。マスターの『お願い』ポーズだ。

「さなちゃん。よかつたらまた、かすみとお話してくれないかしら？」

「え？」

「かすみの母親ね、かすみが小学生のころに死んじやつたのよ。で、あの子、同年代のお友達もあんまりいなくてねえ」

ほらあの子、トゲトゲでウニみたいでしょ？ マスターは苦笑した。隼人から全く同じ比喩表現を使われた私は、笑うしかない。マスターと隼人は何かが似ていて、かすみちゃんと私も何かが似ていた。

「だから変な言い方だけど、仲良くしてあげてほしいの。やっぱり女同士じゃないと分からぬ話つて言つのあるじゃない？ 私、こんなだけど一応男だし」

マスターがちよびヒゲをいじりながら笑つた。私も思わず笑う。

「恋愛のこととかで、女の子の同士の方が相談しやすいかと思つて」

そんなことを爽やかに言つたマスターに、私は反論したくて仕方がなかつた。私が、かすみちゃんから恋愛相談を受けるなんて、お

かしいを通り越している。彼女は私のことを恋敵だと、今でも信じ込んでいるのに。

けれどマスターの顔を見ていたら、そんなことは言えなかつた。何故かその時のマスターには、悲壮感というか、焦燥感というか、そういうものが漂つっていた。

「……分かりました。今度、かすみちゃんに声をかけてみます」

私は出来る限りトゲのない笑顔を、マスターに向けた。

「私のおじりだから、じゃんじゃん食べてよ

私は一週間前に言われたセリフを、隼人に向けて言つた。場所はもちろん、一週間前と同じ回転寿司だ。今回はカウンター席ではなく、テーブル席に座つてゐるけれど。

マスターのくれた茶封筒の中には、一萬円入つていた。週給、二万円。つまり月給だと八万円くらいだろうか。それが多いのか少ないのか、まつとうなバイトをしたことのない私には分からない。けれど、常連のおじさんと一度寝れば手に入るはずのその一万円は、私にとつては貴重だった。初めて、まつとうに稼いだお金というか。

そして私はその給料を有意義に使うため、隼人を誘つて回転寿司に来たわけである。

目の前の隼人は嬉しそうに笑いながら、私の分までお茶を注いで

くれていた。

「初給料入ったんだって？ おめでとう！ むしろ俺がご馳走するよ。一週間お疲れ様つてことで」

「は？ それじゃ意味ないの！！ 今日は私が奢るつて決めてるんだから、あんたは好きなもんをたらふく食べればいいのよ。あ、二万円の範囲内で」

私がそう言つと、「いくらなんでも二万円分も食べないよ」と、彼は笑つた。

寿司の食べ方にも、個性みたいなものが出る。自分の好きなサモンばかり取つている私とは違い、隼人は一皿ずつ違うネタを食べていた。ただ、マグロにだけは何回か手をつけている。マグロが好きだと言つていたのを思い出して、私は内心で笑つた。

「……そういうば、隼人はさ。どうやつてマスターと知り合つたの？」

「ん？ ああ

隼人は鉄火巻きを頬張りながら、笑つた。

「かすみちゃんがあの店を紹介してくれたんだよ。俺の歌をよく聴きに来てくれててさ、コーヒーをこ馳走したいって

なるほど。

「彼女、俺の歌をよく聴きに来てくれてるんだ。で、その度に喫茶店にお邪魔してたら、マスターとも仲良くなつて。かすみちゃん、俺の歌のファンだつて言ってくれてさー。そういうのつて照れるけど、やっぱり嬉しいんだよね」

キラキラした目で語る隼人を、私は睨んだ。

かすみちゃんは『あんたの歌』のファンじゃなくて、『あんた』のファンなのだ。

どうしてそこに気が付かないのだろうか、この鈍感君は。

「？俺の顔に何かついてる？」

心持ち首をかしげる彼に、『田と鼻と口がついてるわ』とぶつきらぼつに答えた私は、まるで小学生のようだった。

「どうしてこんなことになつたんだろうって
そんなことを考える前に 前に進んでしまえばいい。

迷路から抜け出せたら、その時は一緒に笑おう。

私は夕^{ゆふ}公園のベンチに座つて、彼の歌を聞いていた。
彼の歌詞は、いつも真つ直ぐだ。
本人にそう言つたら、笑われた。

「真つ直ぐなものほど、歪んでるものはないよ」と。

けれど私のように、思いつきり歪曲しているのもどうなんだろう。

うたつている彼の周りには、人が集まつていた。といつても六人程度で、そのうちの一人はかすみちゃんだ。彼女は遠目から見ても分かるくらいに、目を輝かせている。あんな近くからあんなキラキラした目で見られて、それでも彼女の気持ちに気付かないあの男の頭は一体どうなつているんだろう。

私は、彼から少し離れたベンチに一人で座つていた。「公園にうつたいて行くから、一緒にいでよ」と誘つてくれたのは彼には悪いけれど、観客に混ざつて彼の歌を聴くのはなんだか気が引けた。

日曜日の爽やかな朝というのは、私には一番似合わない。

彼がときどき、こちらに目を向けてくるのが分かる。私はわざと、

視線を合わさないようにした。隼人が私の方に目を向けていたことに、かすみちゃんも気づいていたから。

「隼人の鈍感」

私は声を出さず、口だけ動かした。それを見ていた隼人が、うたいながら首をかしげる。私の言ったことまでは読み取れなかつたらしい。

『彼は、あなたの方が好きですよ。そういう目をしてる』

あの日のかすみちゃんの言葉を、私は反芻する。あの子もあの子で、鈍い部分がある。

隼人は誰に対しても、優しい目をするのだ。私が特別だというわけではない。

嫌な言い方をすれば、きっと隼人は野良猫に対しても私に対しても、同じ目を向けるだろう。つまりはそういうことだ。

彼は私に対して、恋愛感情なんて持っていない。

隼人の作る曲は、全体的に明るい感じがする。テンポは少し早目で、疾走感がある。夏場によく見かけるアイスのCMみたいに、爽やかな感じ。それは彼の声にもよく合っていて、けれど何かが欠け

ていた。その欠けている物が何なのかは、私には分からぬ。……
プロになるためには、恐らくそこが重要なのだ。

彼の歌声も、曲も、私は好きだつた。けれど、プロになるのは難しいだらうとも思つ。

隼人は、プロになりたいんだらうか。そういうえば、聞いたことがない。

うたい終わった隼人は、「ありがとうございました」と言って丁寧にお辞儀をした。その言葉を聞いて真っ先に、そして誰よりも熱心に拍手をしたのはやつぱりかすみちゃんだ。

……彼から少し距離のあるこのベンチで、一人で手を叩くのもおかしい。私は心中で、こっそりと拍手をした。

ギターを片づけている彼に、かすみちゃんが何か話しかけているのが見える。かすみちゃんも彼も笑顔で、それがなんだか遠くに見えて、私は視線をそらした。なのに、

「さなーー！」

彼に大声で名前を呼ばれてギョッとした。

けれど彼の方を見てみると、そこにはもう、かすみちゃんの姿はなかつた。私はわざと緩慢に歩いて、かすみちゃんはどこに行つたのかとあたりを見回した。

「さな、何をきょろきょろしてるの？」

黒いケースに入れたギターを肩にかけながら、隼人が笑う。

「かすみちゃんは？」

「え？ もう帰っちゃったよ。受験生だから、勉強するって」

「……そう」

「彼女と何か話したかったの？ だつたらいつと早く来ればよかつたのに」

今度かすみちゃんに声をかけてみます、ヒマスターに言つたことを思い出しながら「話すことは特にないんだけど」と私は呟いた。隼人は不思議そうな顔をして、けれどもぱつと明るい顔をして笑つた。彼はいつだって、切り替えが早い。

「俺の歌、聞こえてた？」

「うん」

つかの間の沈黙。彼が鼻の頭を搔いてるのを見て、何か感想を言うべきだと気がつく。

「私は好きだよ」

と言つてしまつてから、慌てて「あなたの曲」と付け足した。

私の言葉を聞いた隼人は、かけっこで一等賞を取つた子供みたい

に、
笑つ
た。

隼人のライブを聴きに行つた翌日は土砂降りで、モーニングの時間が過ぎると、店内には私とマスターしかいなくなつてしまつた。つまり、お客様は一人もない。

「今日は休業にした方がいいかしら」

マスターが窓の外を見てため息をついた。けれど、お客様がこなくて心底困つているという様子でもない。マスターは「こういう日があつても仕方がないわ」と、朗らかに笑つた。

「だけど、せつかくおなちやんに来てもらつたのに、なんだか悪いわねえ」

「いや、私は別に……」

そこまで言つてから、「なんなら今日はお店を閉めて、大掃除しちゃいます?」と提案してみた。どうせ、隼人の家に帰つても暇だ。彼はいま大学に行つているはずだし、今日はバイトもあるから帰りが遅くなると言つていた。

マスターは私の提案を聞いて、ぽんつと手を叩いた。

「それいいわね! そうしましょ。お掃除、一緒にやつてくれる?」

「もちろんです」

マスターは「Welcome」と書いてあるプレートを掲げたダ

ルメシアンを店内にひつこめると、「本日臨時休業」の札を扉にひつかけた。

「隼人君にお願いして、今度店ウチでうたつてもらおうかしら」

「一ヒーメーカーを丹念に掃除しながらマスターがそう言ったので、私は「彼の歌を聴いたことがあるんですか?」と、マスターに尋ねた。マスターはもちろんよと黙つて、顔をあげた。

「彼の歌、青春つて感じよね」

申し訳ないが、青春つて感じがどんな感じなのかは分かりかねる。私は煤すすけたダルメシアンを丁寧に拭きながら、彼の歌声を思い出していた。彼のあの独特の爽やかさが、青春つて感じなのだろうか。

「……隼人つて、プロになりたいんでしょうか」

本人に直接言えばいい言葉を、私は何故かマスターに向かつて投げかけていた。マスターは私の唐突な質問に目を見開き、つまり、きょとんとした。肌が黒いせいか、白目が目立つ。しばらくしてから、マスターは「ふふつ」と笑つた。

「そういう話は、聞いたことないわね。でも多分、彼はプロになろうとは思つてない氣がするわ」

「どうして、でしょうか」

私が尋ねると、マスターは頬に手を当て首をかしげた。

「んー。私は音楽に詳しくないからよく分かんないけど、彼の歌は誰か一人だけのためにうたわれてる感じがするのよね。万人向けじゃないというか。常に、誰か一人だけのことを考えてる。そこが、プロとか、プロを目指す人とは違う気がするわ」

そう言われてみれば、彼の音楽は常にメッセージが込められているような感じがする。そしてそれは、彼の周りを取り囲む観客には向けられていない。彼はどこか遠くに向かって、歌をうたっているようだった。　ああ。だから私は、

彼は、プロになれないような気がするんだ。

「さなちゅーん、どうしたの？」

ダルメシアン拭く手を止めて考え込んでいた私に、マスターが心配そうに声をかけてきた。マスターはコーヒーメーカーの手入れを終えたらしく、オープンの掃除に取りかかっていた。

「あ、すみません。なんでもないです」

私は慌てて立ち上がるの勢いよく扉が開くのは同時に、私は驚きながらも後ろを振り返った。

「……今日、休業なの？」

入ってきたのは、ずぶ濡れのかすみちゃんだ。肩の上にある黒髪

から、ぽたぽたと水滴が落ちていて。けれど彼女はそんなことなんて気にもしていない様子で、マスターの方を睨んでいた。

マスターはちょびヒゲをいじりながら、「今日はお客様がこないから、大掃除することにしたのよ」と説明した。かすみちゃんは黙つたまま、店の奥へと歩き始める。奥には階段があり、店の二階はかすみちゃんとマスターの住居になっていた。

「かすみ、ちゃんとお風呂に入つてあつたまりなさいよ！ 風邪引いちやうわ」

かすみちゃんは聞いているのかいないのか、一言も発することなく店の奥に消えた。

「……あの子、傘持つてなかつたのかしら」

マスターは眉毛をハの字にして笑う。それから、床に点々と落ちている水滴を見て「『めんなさいね』と呟いた。床掃除は、私の役目だからだ。

「気にしないでください。これからモップがけするつもりでしたから、汚れていた方がやりがいあります」

我ながら訳の分からぬFFオローをすると、マスターが笑つた。
それから、

「さなちゃんは、反抗期とかあつたのかしら？ お父さんって、やっぱり煙たかつた？」

と、興味深そうに訊いてきた。私は硬直する。

父親の顔も、声も、その影すらも、思い出したくなかった。

「 せうですね。現在も反抗期継続中といつか」

マスターと二人で笑つてから、沈黙した。空気が薄によつに感じる。マスターはため息をつくと、「こんなこと訊いたらわなちゃんも困ると思うんだけど」と前置きしてから、

「 私みたいなお父さんつて、やつぱつ子供としては恥ずかしいのか
じ」

と、ちよびヒゲをこじつながら舐くよひに濡つた。

「私ね、こんな感じだけど、中身は男なのよ。だから女人のことを好きになるし、みのりと、かすみの母親と結婚した。みのりが死んでしまってから、私はこの店を切り盛りしながら、一人でかすみのことを育ててきたのよ。けれどやつぱりなんていうか、かすみもお年頃になつてきたら、段々と私のことを煙たがるようになつてね。いや、分かってるのよ、思春期の女の子が父親を煙たがるつてことは。でもやっぱり、私が『こんな』でしょう？　そこを気にしてるんじゃないから、考えちゃってねえ」

早口で捲し立てていたマスターは、私の方に目をやつて、「『めん、愚痴つちやつた』と謝つた。私は首を振る。「一般的な『娘と父親の関係がどんなものかなんて、私には想像しかできないけれど。かつたりしません？』

「そうなのよ、と頷くマスターを見て、私はほほ笑んだ。

「かすみちゃんもきっと、そなんだと思います。本心から嫌つてるわけじゃないはずです。じゃなあや、お店の手伝いなんてしませんよ」

やうだといいんだけど、とマスターはため息をついた。それから、

ちょびヒゲを触りながら笑つた。

「ねえ、私ね。ちょっとでもダンディーにならうかと思って、ヒゲを伸ばしてたのよ。本当はヒゲを伸ばすの好きじゃないから、ちょっとだけ。で、このちょびヒゲ、ダンディーな男前に見えるかしら？」

そう訊かれて、私は思わず吹き出した。

ダンディーな男前。

マスターのちょびヒゲに、そんな意味が込められていたとは。
……しかし正直、

「ダンディーには見えないです。でも、マスターのそれはもうトレンドマークになつてますよ」

私が答えると、マスターは満足そうに頷いた。

模様替えではなくただの掃除だったので、店内はそこまで変わつたようには感じない。けれど、掃除をした一人、……つまり私とマスターは、大いに満足していた。

「きれいになつたわね、店」

「そうですね」

誰も気づかないで、アーツ、ピカピカに磨き上げられたサッシュを見ながら、一人で笑った。

マスターが私の父親だったらよかつたの、こと、と繋げることがある。口調や仕草なんて、私には関係なかった。私は、マスターのことを好きになっていた。それは多分、男性としてではなく。

私はマスターに、父親を求めていたのだと思う。

やめて、と言えなかつた。言つてはいけないことのよつた気がした。

私のことを汚いもののように見ていた母の顔を、今でも鮮明に覚えている。

あの頃の私は、『それ』が何なのか、よくわかつていなかつた。

ただ、母に助けを求めるよつとしていたことも確かだ。

反転する世界。ただでさえやつれていた母親の顔色が、青白くな瞬間。バサリと音を立てて崩れた荷物。そこから転がり落ちた真

つ赤な林檎は、酷く歪な形をしていた。

「気持ち悪い」と、母は言った。

「どうして、

その続きは、思い出したくない。

大掃除の次の日も、喫茶店は臨時休業となつた。私は彼の家の窓から、外を見る。豪雨と暴風で、前がほとんど見えない。そう、昨夜から台風が直撃していたのだ。

「隼人は今日、バイトあるの？」

私が振り向くと、ギターの調律をしていた彼は笑つた。

「俺の働いてるところは、二十四時間営業のファミレスだからね。台風じや、休みにはならないよ」

「大学は休みだつたのに」

ガタガタと音をたてる窓ガラスに、私は手を伸ばした。もちろん、窓を開けるつもりはない。ギターの調律をするのに、窓の音が邪魔なんじやないかと思ったのだ。

風が向きを変えたのか、大粒の雨が一瞬だけ窓を強く叩いた。

「俺はもつすぐバイトに行くけど、さなはどつする？ 一緒に来る

？」

「いい。家でコーヒーの勉強するから」

雨に濡れたくない私がそういつと、隼人はため息をついた。

「傘をさしても、ほとんど意味ないだろつなあ」

隼人はバイクも車も自転車も持っていない。どこかに行く時は常に徒步だ。この雨じや、バイト先に辿り着くころには必ず濡れになつているだろう。隼人はため息をつきながら立ち上ると、ギターを壁に立てかけた。それからリュックにタオルを入れて、半透明の雨合羽^{あまがっぽ}を羽織つた。

「てるてる坊主みたい」

私が笑うと、隼人は人差し指で鼻をかいた。照れた時の、彼の癖だ。

「帰りは、晴れたらいいなあ」

隼人は笑いながらドアを開けた。冷たい風が部屋の中に勢い良く入りこんできて、テーブルの上に置いてあつたマスターのメモがバサバサと音をたてた。

喫茶店で働き始めて一週間が経とうとしていた。常連さんの顔は覚え始めたし、「いつも」という注文にも対応できるようになつてきた。特に印象深い常連さんの「いつも」メニューは、エスプレッソ三杯だ。それを、ミルクも砂糖も入れずに一気飲みする。あんな苦い飲み物をよく三杯も飲めるなど、いつも感心していた。マスターは店を閉めた後、コーヒーを一杯ご馳走してくれる。それも、毎日違う種類を。

「さなちゃんもせつかく喫茶店で働いてるんだから、いろんな味を覚えないとね！」

と書いてくれるもの、一杯百二十円の缶コーヒーとはわけが違うので、いつも申し訳ないなと思っていた。

「……思つてゐるだけで、もひれるものはもひつんだけひね

私はマスターのメモを見ながら、一人で笑つた。

隼人が出かけてから三時間後、台風は過ぎ去り、しつしつと降る雨だけが残つていた。風がないとはいへ、雨の中を歩くのは憂鬱だ。なのに私は、近くにあるスーパーに向かつて早足で歩いていた。

トイレットペーパーが切れていたのだ。

隼人の性格からしてそういうものは買い置きしているはずなのに、どこを探しても見当たらない。しばらく探して諦めた私は、ビニール傘を手に取つた。

透明のビニール傘は、雨粒が流れ落ちていく様子を見れるのが面白い。その代わり、いかにも安物臭かった。

スーパーでトイレットペーパーと、ついでにお菓子を数点買つことにした。この季節になるとさつまいもや栗を使つたお菓子が続々と出てくる。それらに目がない私は、新商品をいくつかカゴに放り込んで、レジへと向かつた。

私の前で会計をしているお姉さんは、見切り商品ばかりを買い込んでいた。それも、やたらと甘いものが多い。菓子パン、コーンフレーク、大福、まんじゅう、プリン、チョコレート菓子、ショーキーム……。私はお姉さんの方にちらりと目をやった。人形のように細い脚を露出している彼女は、酷く疲れた顔をしていた。セットされているはずの巻き髪は、なぜか乱れているように見える。

誰かに似ている、と考えかけて、やめた。

スーパーから出ると、私は安物のビニール傘をさして、隼人のマントショーンへと歩き出した。遠くの方で、雲の隙間から青空が顔を覗かせている。もうすぐ、雨はやむだろつか。

そんなことを考えていた私は、足を止めた。

高校生くらいの女の子が、道端に座り込んでいたのだ。傘もささずに。

体育座りをして膝に顔を埋めているせいだ、表情は見えない。具合が悪いのかと通りすがりの男の人が声をかけると、女の子はかすかに首を振った。男の人は首をかしげると、そのままどこかへ行ってしまった。

私は彼女に近づく。知らない人だったら、どうじょうど悪いながら。

「 かすみちゃん？ どうしたの」

傘を差し出しながら尋ねると、彼女が顔をあげた。

それはやつぱりかすみちゃんで、彼女は泣いていたのだと、何故か直感的に思った。

「風邪ひくよ?」

私はかすみちゃんが濡れないように傘を差し出すと、彼女は首を振った。

「いいんです、もう」

もう、の続きを「もう濡れていいるから」なのか、それとも他の単語が入るのか、私には分からなかつた。かすみちゃんは立ち上がりうとせず、膝を抱えたまま地面にうずくまつていてる。喫茶店、つまりかすみちゃんの家は、ここからだと少し遠い。

送つていいくべきか、傘を貸すべきかと考えている私に、かすみちゃんは笑いながら訊いてきた。

「さなさんの家つて、この近くなんですか?」

「……そうだけど」

私の家といつよりも、あれは隼人の家だ。言い淀んだ私に、彼女は構わず尋ねてくる。

「行つてみたいんですけど、いいですか?」

「えつ?」

「……冗談ですよ、カマかけただけです」

かすみちゃんは口を歪ませて笑うと、立ち上がった。私よりも一回り小さいかすみちゃんは、子供のように見えなくもない。けれど、睨むようなその目つきは、子供のものではなかつた。

「隼人と同居してゐるんですか」

「 ちょっと訳ありでね」

嘘をつくるのが面倒になつた私はあつさりと肯定した。嘘をついたところで、「さなさんの家に連れて行ってください」だのなんだのと追及されたらばれることだ。

今の私には、隼人の家以外に帰る場所がなかつた。

この子は私のことを敵視しているんだうつか。私は、髪の毛が頬に張り付いている彼女の顔を見つめた。彼女は唇を噛んで、私の方を睨んでいる。細い目の奥が、やらやらと揺れているように見えた。

「……喫茶店に帰つた方がいいわ。本当に風邪ひくわよ」

九月も中旬になると、大分涼しくなつていた。雨が降つた日は寒いくらいだ。私はかすみちゃんの薄いカーディガンを見た。薄い灰色だったはずのそれは、濡れたせいで重い色に変わり、彼女の身体にぴつたりと密着している。

「…………」

私の言葉を聞いて俯いたかすみちゃんに、ぴんときた。

「家、帰りたくないの?」

なるべく柔らかい口調で尋ねてみても、彼女は口を開けようとしない。そんなかすみちゃんを見て、私は笑つた。

「私に似てる」

「え？」

眉間にしわを寄せて顔をあげたかすみちゃんに、私はもう一度笑つた。

「とにかく、その恰好じゃ寒いでしょう？ うちにおりいでよ」

「うひつて……」

「まあ、隼人の家だけど。今、隼人いないしさ。かすみちゃんを家にあげても、隼人は怒らないわよ」

私は話しかけながら、彼女の腕を掴んで引っ張つた。

嫌がられるかと思つたけれど、かすみちゃんは何も言わなかつた。

かすみちゃんを半ば強引にお風呂に入れてから、私は濡れている彼女の服を折り畳み、自分の服を引っ張りだした。この家にも洗濯機は一応あるが、乾燥機がない。びしょびしょの服をもう一度着るというわけにもいかないだろう。

「着替え、カゴの中に入れておくからー」

風呂場に向かつて叫ぶものの、返事がない。一瞬不安になつたが、シャワーの音が聞こえてきた。……本当に私とそつくりだな。私はため息をついて、脱衣所から出た。

スーパーで買つてきたお菓子を開封して、お皿に並べていく。飲み物は麦茶しかなかつたので、それを注いだ。

これがジュースとかコーヒーだつたら、本格的なお菓子パーティーみたいだつたのに。

そんなことを考えていたら、かすみちゃんがお風呂から出ってきた。思つたよりも早い。

脱衣所から出てきた彼女が、素直に替えの服を着てくれているのはホッとしたけれど、髪の毛は若干湿つていいように見えた。

「……髪、ちゃんと乾かした?」

「乾かしました」

「うそ」

頭に触れようとすると、彼女はふいっとせつぽを向いた。私は苦笑する。

「別に襲つたりしないわよ。そういう趣味はないし。……需要があるなら『する』けど。」

「分かつてます、結構です」

かあつと顔を赤くした彼女を見て、私は目を細めた。若いつていなあ、と思つてしまつ。……自分も若いはずなのに。

「ま、座りなよ。そこにあるお菓子も適当に食べて。麦茶もどうぞ」

私は笑いながら、脱衣所にドライヤーを取りに行く。リビングに戻ると、彼女は道端にいた時と同じように体育座りをして、膝に顔をうずめていた。

似ているけれど、決定的に違うのは。

私は彼女の頭をそつと撫でた。思った通り冷たくて、そして震えていた。

子供のころ、雨が好きだった。

わざと傘を忘れて出かけて、ずぶ濡れになっていた。

濡れるのが好きだったわけじゃない。

濡れた髪の毛は冷たくて、身体に張り付く服の感触はどうも不快だった。

ならびに、私は傘もわざわざ外を歩いていたのか。

私はドライヤーのスイッチを入れて、かすみちゃんの髪を乾かし始めた。

彼女は何も言わないし、顔をあげようともしない。

わざと、声も出したくないのだろう。

「……私ね。子供のころ、雨の日は傘をわざわざ外を歩くのが好きだったんだ。なんでだと想つへ？」

ドライヤーの音に負けなにより、私はかすみちゃんに話しかける。かすみちゃんは、せっぱり答えようとしない。彼女にとって、今一番触れてほしくない話題なのかもしれない。

「濡れてたらさ、泣いててもばれないでしょ？ だから」

私は勝手に答えを教えると、ドライヤーのスイッチを切った。洗面所に戻しに行くのが面倒で、床にそのまま放置する。それから、彼女の前にあるカツマヨもチップスを手に取って食べた。

「かすみちゃん。なにかあった?」

もしかしたら、普通はこんなに単刀直入に尋ねたりしないのかもしない。私は、人と付き合うのがうまくなかつた。他人と身体を重ねた回数が多いだけで、誰かと寄り添つて生きてきたわけではないから。

雨音しか聞こえない時間が続いて、私はようやくそのことに気付いた。

「あ。答えたくないなら、答えなくても」

「お父さんと喧嘩しました」

答えなくてもいいよと私が言つ前に、かすみちゃんが口を開いた。早口で、強気にも聞こえるその口調は、どこか痛々しかつた。

「喧嘩したというか、私が一方的に怒鳴つて家を出てきました」

かすみちゃんのお父さんと言えばもちろん、マスターのことだ。私は首をかしげる。マスターが、かすみちゃんを怒らせるとやつなことをしたんだろ? つか。

「……お父さんは怒らないんです、いつも。だからなんか、無性に腹が立つて」

声が震えているのは、怒つていてるからじゃないんだろ? 私はか

すみちゃんの、線の細い背中を見た。

「最低なのは、私の方なんです。……いつからだつたのかは分から
ないけど、私はお父さんのこと恥ずかしいと思つようになつてしま
した。授業参観にも来ないでつて言いました。なよなよしてて恥ず
かしいからつて、そこまで言つたんです。なにお父さん、その時
も何も言わなくて、悲しそうに笑つてただけで」

先ほどまでは対照的に饒舌になつたかすみちゃんは、ぼろぼろ
と言葉をこぼした。それは明らかに彼女の本音で、

「……本当は知つてるんです。お父さんは、すゞくいい人なんだつ
て」

間違ひなく、彼女の本心だつた。

「人目ばっかり気にして、……なよなよしてるのは、私の方なんで
す。父の方がよっぽど強い。なのに、どうしても受け入れられなか
つた。小さいころ、父について少しかわれて。たたそれだけな
のに。父は何も悪くないのに」

「……タイミングいいわね」

「え？」

不思議そうな声を出すかすみちゃんの背中に、私は笑いかける。
まさかつい最近、マスターとも似たような話をしたとは言えない。

だけビビリし安心した。知つてはいたけれど、確認できたかい。

結局、かすみちゃんもマスターも、

「お父このことが好きなんじゃなー」

「え?」

かすみちゃんが怪訝な顔をしてこちらを振りかえる。私は自分の服の袖を引っ張つて、かすみちゃんの頬に残つていた涙の跡を拭いた。

「マスターは怒らないって言つたけど、叱るべき時は叱る人でしょ。感情的にならない、つていうのかな。私はマスターのそういうこところが好きなんだけど。……かすみちゃん、今日はなぜかマスターに怒つたの?」

「……進路のことです。お父さん、本当に何も言わないから。私のことなんて本当はどうでもいいんでしょって、思わず言つちやつて……」

「思わず言つちやつたってことは、マスターが本当はそんなこと考えてないって、知つてるんだ?」

正直、中卒の私は進路について揉める家族の話はよく分からない。けれど多分、マスターはかすみちゃんのことをどうでもいいとは思つてない。多分というか、絶対。じやなきや、私にあんな話をしでこないはずだから。

「マスターも悩んでるんじゃないかな。かすみちゃん、思春期の女の子だしさ。……進路のことは多分、余計な口出しをして、かすみ

ちやんが混乱するのを怖がつてゐんじやないかな。私はそつとつ

「ひらりを見ていたかすみちやんが、ほんの少しだけ笑う。

この田から少しだけ、彼女との間の空気が変わった。

……確かに、遊園地に行きたいなんて話を振ったのは私だ。けれど、

「あらあ、じゃあ皆で行かない！？ かすみも、受験勉強の息抜きが必要だと思うのよ！ さなちゃんも隼人君とデートしたいでしょ！？ ね！！」

こんな話の流れになるとは、思っていなかった。

話は数分前に遡る。

私は店内の掃除をしながら、十月に入つてからずいぶん涼しくなりましたねと、マスターと話していた。ちなみにその時は閉店後で、お客は誰もいなかつた。

どこかに出かけるにはちょうどいい気候よね、とマスターが笑つたので、遊園地にでも行きたいですねと、軽い気持ちで返した。そう、本当に軽い気持ちで。

「ダブルデートみたいなの！ ビヨウ！…」

そう、こんな返事が来るとは思つてもみなかつたのだ。

隼人もだが、マスターも鈍い。かすみちゃんは隼人のことが好きで、私を敵対視してゐんだつて、どうして気付いてくれないのでう。……まあ、最近少しだけ、かすみちゃんとは仲良くなつっていた

けれど。

あの、雨の日以来。

「いやあ、どうでしょう……」

曖昧な返事をしてみたものの、思つた以上にマスターは食い下がつてきた。今ならハロウィンの限定アイテムがどうのこうの、スイーツがどうのこうの。私は適当に相槌を打ちながらも、マスターは『かすみちゃんと』出かけたいんだということに薄々気づいていた。そして、一人だけで出かけるのが不安なんだつてことも。……しかし、

「隼人の都合もありますし……」

隼人とかすみちゃんと、私。3人揃つて遊園地だなんて、修羅場にもほどがあるわ。私は内心で突つ込みながら、マスターの誘いを回避した。つもりだつた。

「私も、四人で遊園地に行きたい」

店の奥から、かすみちゃんがそう言つてくるまでは。

隼人もノリノリで誘いに乗ってきて、結局浮かない顔をしているのは私一人だけだった。ああ、どうしてこんなことになってしまったんだろう。

マスターは喫茶店を臨時休業にして、隼人は大学を休んで、かすみちゃんは文化祭をさぼつてまで、遊園地に来た。

皆そこまでして遊園地に行きたかったのかと突っ込みたいけれど、遊園地という単語を最初に出したのは私なので文句は言えない。

かすみちゃんとマスターは、若干距離をあけて歩いている。私と隼人も、若干距離があいている。というかもう、それぞれの間に距離があった。これじゃ、なんのために四人で遊園地に来たのかも分からぬ。

「……ね、何か乗りますよー！」

気まずさを緩和するためか、やたらと陽気な声でマスターが提案する。隼人は相変わらずのんびりした口調で「いいですねー」と賛同した。……多分、このメンバーの中で唯一気まずさを感じていな人間だろう。

「で、何に乗るの？」

かすみちゃんのとがった口調に、みんなで沈黙する。別に、彼女が不機嫌なのだというわけではない。とがった口調は彼女の特徴で、それは皆知っていた。

黙つたのは、「何に乗るか」を決めていなかつたからだった。

海賊気分になれるバイкиングは男のロマンよ！！ なんてことを言いだしたのはマスターで、そうですねと答えたのは隼人だった。拒否したのはかすみちゃん。酔うから乗りたくない、というのが彼女の意見だった。私はバイкиングという乗り物に乗ったことがないから、酔うのかどうかは分からぬけれど、正直あまり興味もなかつた。

結局、隼人とマスターがバイкиングへ、私とかすみちゃんはそのそばにあるベンチに腰掛けた。餌をもらえると期待したのか、足元に鳩が次々と寄つてくる。あいにく、ポップコーンやスナック菓子は持つていなかつた。

妙な組み合わせになつたと思つ。これならまだ、マスターと私、隼人とかすみちゃんの組み合わせの方がよかつたんぢやないか。： 鈍感組おとじは、そんなこと気付いてもいなうだろうけど。といふかマスターは、かすみちゃんと遊びに来たかつたんぢやないのか。どれだけロマンチックなんだ、そのバイкиングとやらは。

「……この前のこと、ですけど」

いきなりかすみちゃんに話しかけられた私は、必要以上に大きく反応した。私の動きに驚いた鳩が、バサバサと音をたてて飛び立つていく。その様子を見てから、私はかすみちゃんの方に目をやつた。彼女はバイкиングの方を見ている。

「……」の場のつて?」

「嘘の田の」

「 ああ

どう反應すればいいのか分からなくなつて、私は黙つた。あれから、たまに話したりする程度には仲良くなつていったけれど、その日はお互い触れよつとしていなかつたのに。

「お父さんと話しあつたんです。ちやんと」

「え?」

予想外の言葉に、私は田を丸くした。つまづき、いまだに氣まずいままなのだと思っていた。だからこそマスターも、遊園地に誘つてきたのだと思つていたのに。

「進路のことも言いましたし、……お父さんと仲良くしたいとも、伝えました」

「ああ」

だからか。マスターが張り切つていたのは氣まずさを解消するためではなくて、距離感を縮めるためなのか。妙に納得して、私は頷いた。

「……あなたには、感謝します。あの時は、ありがとうございました」

彼女の言葉とともに、船の形をしたアトラクションがゆっくりと動き始めた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2856y/>

その歌を

2011年11月24日12時01分発行